

ダナン（ベトナム）における研学生活

Duy Tan University
Institute of Research and Development
Lecturer & Researcher of Physics

水山 一仁

mizukazu147@gmail.com

mizuyamakazuhito@dtu.edu.vn

1. はじめに

僕は 2018 年 4 月からベトナムのダナンというベトナム中部の都市にある Duy Tan University (DTU) という私立大学の講師 (兼 研究員) として着任しています。ダナンといえば、日本では最近 HIS などの旅行代理店が東南アジアの新しいリゾート地として売り出している場所ですが、元々、ダナンはハノイ、ホーチミンに次ぐ人口 145 万人のベトナム第 3 の都市で、政府直轄地であり、理系、特に IT 系の技術発展に力を注いでいる都市です。そういうこともあってか、街にある図書館は科学に関する書物ばかりを扱った科学図書館しかないのが特徴的です。僕が所属する DTU は 1994 年にベトナムで初めて設立された私立大学で、非常に新しい大学ながら、ベトナム国内の大学ランキングでは第 6 位 (2017 年時点) という高い評価を獲得しています。上位の大学が全て国立の総合大学であるということを考えると、私立で単一の大学としてはベトナム国内随一の実力と規模を誇る大学と言うことができ、今後もますます発展が期待されている大学です。僕の所属部署の自然科学分野の研究開発部門には数学、物理、化学などの研究者が総勢 27 名在籍している (2018 年 6 月現在) ほか、他分野 (情報科学、生物、社会科学、看護、薬学、外国語など) の講師など総勢 800 名のスタッフが在籍しています。学生数はおおよそ 2 万人ですが、現在は学部教育が主で、大学院教育プログラムはビジネスや情報科学分野などでスタートしているものの、まだそれほど本格的なものではなく今後の拡充が期待されています。

2. ダナンにくることになったきっかけ

そもそも、「なぜベトナムに？」とか「なぜダナンに？」という質問は日本の知人からだけではなく、現地のベトナム人からもよく聞かれます。僕が今までにポストドクでフィンランドやイタリアに行っていたことがあることを知っている人の中には「なんで、そんなまた羨ましいところ選んじゃって！」なんて言ってきた人もいました。「日本の生活に疲れてリゾート地で癒やされたいから選んだんじゃないのか」なんて思う人もいるかもしれません。それは半分当たりです(笑)。日本の生活に疲れたわけではありませんが、食べ物が美味しく、気候もベトナムの中で最も穏やか(※¹)で女性や子供が夜中でも独り歩きできるほど治安も良く、人々は皆親切で明るくて女の子も可愛くて、美しいビーチが歩いてゆけるところにあって、給料は日本より安いとはいえ、生活に十分な金額がもらえる、となればそんな絶好のオファーを断る理由なんかありません。

そんな冗談はさておき(僕のことを知っている人は冗談と受け取ってもらえない可能性があるのですが.....)、きっかけは5年ほど前に遡ります。5年ほど前、僕が大阪大学核物理研究センターに在籍中の時のある日、フランスのボルドー大学のベトナム人大学院生から一通の電子メールを受け取りました。当時、僕は核物理ではまだ珍しかった微視的構造手法に基づく核子散乱反応の微視的記述に関する論文[1]を発表したばかりだったのですが、当時その大学院生は独立に同じような研究を取り組んでいて、メールの内容は、「自分の計算結果とあなたの計算結果が合わない。自分の計算ミスかと

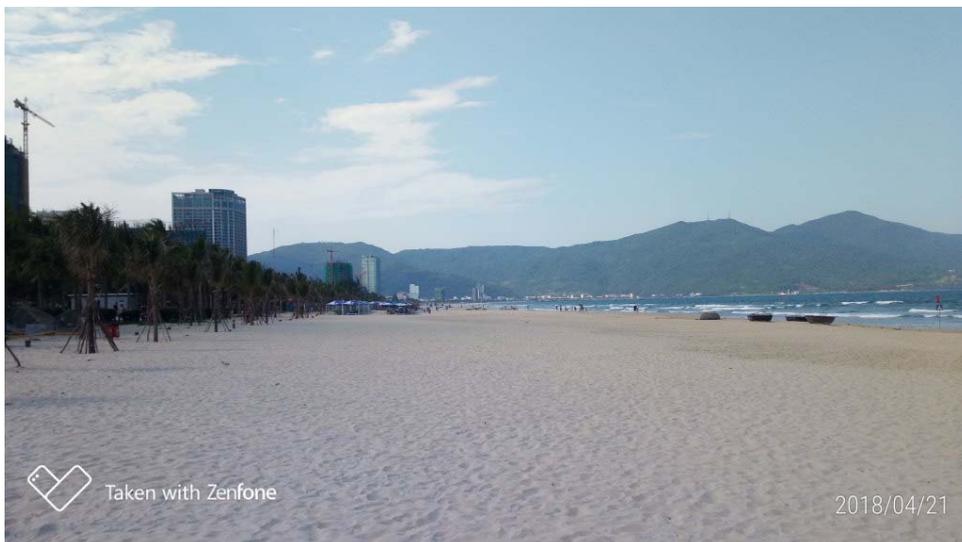


写真 1: 大学から歩いて 30 分ほどでいけるミーケビーチ

※¹ ベトナムというと高温多湿で蚊なども多い印象がある人も多いですが、ダナンは僕の故郷の函館のような陸繋島で海に囲まれているので風通しがよく意外とカラッとしていることが多く、蚊もほとんどいません。

思ってチェックに相当な時間を費やしたがミスは見つからないので議論がしたい」というものでした。僕は論文出版に際し、当時、他に比較対象のない計算だったということもあって、論文には載せてない様々な観点からの分析やチェックを行ってノートにしたためてあったのですが、その中に「連続状態を厳密に取り扱った場合と離散化した場合の比較」も調べてありました。微分散乱断面積において散乱角度が大きくなると連続状態の取り扱いの違いが如実に現れるというものがありました。彼の計算との違いはまさしくそれに当てはまったので、その観点で議論を行ったりチェックを行ったりしたところ、どうやらそれで間違いがなさそうだということで落ち着きました。その後は研究会とかで、たまに出会って話すくらいかな？と思っていたのですが、気が合ったのか、その後も事あるごとに、研究の相談などを持ちかけられてはアイデアや意見を交換したりするようになりました。彼の論文の共著者になっても良いくらいの寄与をしたものもあり、実際に打診されたりもしたのですが、原子力機構の特定課題推進員という身分の都合上、丁重に断りながらも交流を続けました（謝辞には載せてもらいました）。そのうちに彼からベトナムの大学の教員になることを勧められ始めていました。しかし、僕はベトナムを含む東南アジアは一度も行ったことがなかったですし、既に海外のポスドクを4年もやり、そろそろ国内に腰を落ち着けたいなという願望も強かったので、返事を曖昧にしてごまかし続けていました。

しかし、程なくして原子力機構の任期が終わり、様々な公募に応募し、中には面接までいったものがあつたものの惜しくも採用に至らず、いよいよどこも行き先がなくなった（※²）時、フランスで学位取得後、アメリカでポスドクをやっていた彼の口から出



写真 2： 大学近くのハン川のほとり

※² 厳密には、ありがたいオファーもいくつかありましたが、年齢や家庭の事情面、適性などの観点から断らざるを得ないので断ったものもありました。

てきた言葉は「ベトナムの大学はどこでもあなたを歓迎するよ。どこがいい？」でした。どこが良いと言われても、僕はベトナムをよく知らないし、そんな言葉を鵜呑みになんて出来ないし、でも、次の行き場所がどこも決まってないのでとりあえず彼に任せてみることにしました。それで紹介されたのがダナンの DTU だったというわけです。しかし、僕にとっては、ベトナムは未知の土地ですし、DTU も聞いたことがない大学だったので正直不安でした。書類を出したら Skype 面接の通知が届き、面接に挑みました。面接には僕が今所属しているグループの副グループ長、人事部長、そして大学の副学長（現学長）がいました。そこで言われたのは、「あなたの事情はあなたの友人からよく聞いています。あなたが次の行き先が決まっていない経緯やあなたがあなたの友人に今までどれほど協力してきたかも全て聞いています。我々はあなたが望むなら心から歓迎します。色々不安もお有りでしょうが是非ともご検討ください。」という趣旨のものでした。若干、彼らの英語が聞き取りにくいところがあったのと、正直、言われたことが信じられなかったので聞き間違えたのかと思っていたのですが、実際、面接の一週間後に採用通知が来たのでした。面接では、雑談や給与面のちょっとした交渉的な話や、ついでに日本語も教えられないかななどの話をしました。採用通知を受けて、僕はそれでもまだ迷いがあったので、「一週間、時間をください」と言ったら「もちろん、ゆっくり考えてください！」という返事が来ました。そこで、僕は妻と二人でダナンを下見しに行って、ダナンは素晴らしい住みよい街だと知りました。あとベトナムでは平均給与はまだまだ低いにも関わらず、(日本円では大した金額ではないもののベトナムの平均給与や物価を考慮すると) 極めて破格な金額と条件が提示されていた上、こちらの事情や経緯、決断までに時間がかかるであろうことなどの最大限の配慮と理解が示されていた



写真3： ベトナム人に気に入られると家族でもてなし。

二家族から同時にもてなされて大賑わい。

たことに嬉しくなって、僕はダナン行きを決断しました。

後で聞けば、「ベトナム人は一度気に入ったら損得勘定抜きにした、死ぬまでの付き合い、気に入らなかつたらその時だけの付き合い」だそうで、彼と彼の友人たちは最大限の配慮と理解を持って僕にオファーをくれたのでした。

3. ベトナムの悪いところに目を向けるとブーメラン（苦笑）

日本の高度成長期時代に相当する時期にあたる現在のベトナムは非常に活気に満ちています。職場の平均年齢は若く 20 代から 30 代が中心です。この 8 月に正式に就任した Duy Tan 大学の新学長は 38 歳、僕より年下です。なので、僕なんかはどちらかというところ年寄りですね。ベトナムには日本と同じように年上を敬う文化がありますので、僕は組織の肩書的には真ん中くらい、なのに年齢は相当年長の方です。日本と大きく違うのは女性が元気で社会の中心を担っていることでしょうか。失業者してブラブラしているのは男ばかりで、女性はとにかくよく働きます。あと掃除をよくします。ベトナムというと東南アジアの雑然とした屋台の風景で決して小奇麗じゃないイメージがあると思うのですが、ベトナム人は実は綺麗好きで掃除好き。ただ、その掃除の仕方は大雑把。一度、全てのゴミを床に落として一気に掃除するのがベトナム流。床に落としてしまった時に遭遇すると小汚い印象を受けてしまうかもしれません。しかし、こまめに掃除をしているので、町中でよく観察すると感心するほどゴミが落ちていないんです。ぱっと見は綺麗だけどよく見るとゴミだらけで汚いヨーロッパとは正反対。ベトナムのライフスタイルは朝が早く、お店は朝 6 時から開いています。僕の職場も勤務時間は、午前中は朝 7 時～11 時、午後は 1 時から 5 時まで。一日 8 時間。土曜日でも午前中は出勤です。



写真 4： 職場の面々と昼食（数学、物理の専門家の方々と）

基本的に真面目ですがシンプルでフレキシブルを好みます。物事の制度や約束事、スケジュール等を細かく決めることは好みません。やる気が起きない時や目的が明確にならないとなかなか動かないことがあります。一度、目標が明確になったり理解したりすると途端に集中し始めて早いです。素直でまっすぐで悪気はありません。基本的に人と競争することを好まない平和主義。おしゃべりも大好きで、カフェやバー、レストランで、大勢で語ったり飲んだりするのも大好き。でも、それを他人に強いることもしません。個々人の家庭や個人の都合も尊重する個人主義的などところもありますし、フレンドリーかと思えば人見知りな所もある。いい加減などところもあるかと思えば、非常に生真面目などところもあって、こだわるところには非常に細かくこだわります。何かをするときには充実することや楽しむことは忘れません。あ、これ、僕の性格のことではありません。ベトナム人の性格です(笑)。そうなのです、ベトナム人の性格はどことなく僕の性格とそっくりなのです。最初は、まさか偶然だろうと思っていたのですが、知れば知るほど自分の性格や価値観と共通するところが多いのがベトナムです。もちろん、ベトナム人と言ってもたくさんいますし、個々人で性格はもちろん違いますから、たまたまというところもありますけれども、例えば何か日本や他国の常識とは違うことに遭遇した時、「もし僕だったら…」と言う前提で考えて予測すると、少なくともこれまでのところ大体当たってしまうんですね。これがすごく面白い。良い所も悪い所も自分にそっくりなんです。なので、ベトナムの嫌なところに目を向けるとそれはそっくりそのまま自分にブーメラン。そんなところも非常に気に入っています。

あと、ベトナム人は家族をととても大事にします。職場に子供を連れてくるのは珍しくはありません。日本で職場に子供を連れて来て、子供がキヤーカーはしゃいでいたら、きっと皆いらいらすると思います。しかし、それが日本社会の異常な点なのかもしれないと海外生活を経て思うことの一つです。日本では職場に私生活を持ち込まない緊張感のある職場は普通であると感じます。でも、それは世界的に見たら決して普通なことではありません。イタリアやフィンランドでも家庭の事情に応じてたまに子供を連れてきたりするのを見かけましたし、別にそれを咎める雰囲気などありません。社会問題の原因とは皆が普通で当たり前だと感じていて自覚のないところにこそ潜んでいるのではないかと思います。

「親の背中を見て子は育つ」は日本のことわざです。昔、仕事といえば会社勤めのサラリーマンより自営業のほうが当たり前だった時代、このことわざが意味するところは、親の日常生活だけではなく、親の仕事をしている様も普段から目にすることで、子供は様々なことを学び育ててゆくことを示していたと思います。親が毎日、子供が入り込む余地のない職場に通って、寝てしまった時間に帰ってくる。それ以外でも、親は子どもとろくに仕事の話もするわけでもない、そんな昨今の状況で子供はどうやって親の背を見て育つことができるのでしょうか？原子力機構にいた頃に、ある人が「組織は人材育成

に真剣に取り組まなければならない。そして、真の人材育成は人にあれやれこれやれと指示してやらせるのではなく、背中を見せて育てるべきだ。その見せるべき背中を、見せられてる人がいないのが問題だ」と言っていました。僕もそう思います。ただ、人の背中をみる環境もなければ経験もない人間が見せられても簡単に育つものでもないとも思います。



写真5：職場に連れてきた同僚の5歳の娘に何故か気に入られて・・・

ある日、同僚が幼い娘を連れて来ていました。その娘は父親の隣で夢中で塗り絵をしていました。時折、真剣な顔して腕を組んで考え事をしているようなしぐさをしていました。ふと隣の同僚に目をやると、同僚は研究に没頭していて真剣に考えこんでいます。そう娘は父親の真似をしていたのです。子供は本当に親をよく見ているなあと思いました。また別の日に、別の同僚がこれまた幼い娘を連れてきた時のこと。気づいたら僕のデスクを覗いて、「ないすとうみーちゅう♪」と笑顔で声をかけてきました。多分、幼稚園で英語を習っているのでしょう。そのうち、慣れてきて、「これは何？」「あれは何？」と質問攻め。挙句の果てには僕の膝の上ののって僕のデスクでお絵かきを始めたり、いたずらしたり……仕事にはなりませんでしたね(笑)。しかし、土曜日だからいっか！という感じでした。

仕事への集中に支障をきたすという意見もあるでしょうが、たまに子供を家庭の事情で連れて来るくらいのことを許容できるくらいで丁度良いのではないかと思います。そもそも仕事を含めた社会づくりとは、まずは未来に生きる子供たちのためのはずです。

仕事をしてお金を稼ぐことも応用研究も基礎研究も、最終的には未来の社会にとっての財産を創りだそうとする行為のはずです。そのことを忘れては継続性と成長のある社会というのは作っていけないと思います。そのためには、子供の存在を邪魔に感じる感覚そのものがいけないと思います。まあ、職種・職場の種々の事情によっては無理なこともあるでしょうが、基本的な考え方として、日本社会はもう少し寛容性やいい加減さがあっても良いのではないかと思います。ただし、それは働いている人が楽をするためであってはけません、創造性豊かな社会を創るためです。



写真 6： バリエティ豊かで非常に美味しいベトナム料理の数々



写真7： ベトナムは料理も美味しければ飲み会も楽しい、
これは痩せない（まずい・・・）

4. ダナンにおける生活と研究活動

DTU の組織体系は日本と随分違います。日本では組織はいわゆるピラミッド型。平社員がいて、中間管理職がいて、トップがいる。そういう構造です。意見を上申する場合、まずは自分の上司に言って、会議の議題に上げてもらい、少しずつ上に上がっていく。逆に、組織としての命令や指示も上から順番に下りてくる。DTU はピラミッド構造ではありません。所属各部署の長はいますが、部下に命令する権限はほとんどありません。ベトナムは、国家としては社会主義で民主主義ではありませんが、国家の中にある組織内では日本よりずっと民主的で自由があり自主性が重んじられます。役所などでも同じなんですね。窓口レベルで個人の判断、自主性が重んじられるため、担当者によって対応が全く異なるということがザラに起きるのもベトナムです。大学における諸手続き関係でもこれは頻繁に起きることなので慣れるまで結構苦労しました。一方で、憲法で自由が保障されているのに組織内ではガバナンスを重んじ、とりわけ個人レベルでは自由が少ないのが日本。このように日本とベトナムでは社会構造の本質がほぼ正反対なんです。とりわけ DTU は若き学長の方針もあって、研究者ファーストの姿勢が徹底されています。研究は研究者各々の自主性に任せます。進捗報告などは上司や大学から聞かれることはまずありません。1年に1本の論文が出せるかどうか、それだけです。出せなかったら、次年度の給与が減らされるだけで、それでもすぐにクビになるというものはありません。DTU では、外国人研究者を優先して採用したいという方針から、経歴によりますが最大で月に日本円で20万円程度もらえます。ベトナムの物価は日本の3分の

1 程度なので、この給与は日本で 60 万円くらいもらえる感覚です。実際、月に 10 万円くらいあれば、ベトナムでは相当余裕をもって暮らせます。ベトナム人は大卒初任給の給与平均が月 3 万円程度で、10 万円となるともはや教授クラス。20 万というのは相当破格ということが言えます。年 1 本の論文は給与の半分程度ということになっているので論文が出せないと半分に減額されてしまうわけですが、それでも生活できないというほどのものでもありません。契約は通常 2 年ですが、契約書に「更新可能」の文言が含まれていればノルマをクリアしている限り契約の更新は可能です。こちらにはほとんど終身雇用はありませんので、「更新可能」な契約がパーマメント雇用に相当するようです。

ほんとベトナムでの暮らしはお金がかかりません。アパートは最初金額を聞いた時、そんなに安くないと思いました。でも、例えば僕が今、住んでいるアパートは 40 平米、家具家電付き、水道料金無料、WiFi 無料、乾燥機付きの無料共有ランドリーありで、おまけに、週に二回の部屋のクリーニングサービス（シーツ交換ありのサービス）ありのアパートメント、立地は空港から徒歩 20 分、大学まで徒歩 20 分、ビーチまで徒歩 30 分のダナン市内の本当にど真ん中、これで 4 万円弱。こんな物件、日本じゃ 10 万円超えてしまうと思います。スマホもプリペイド式ですが普通に使っても 1 ヶ月 500 円もかかりません。食事も美味しくて日本の 3 分の 1 程度の値段。ベトナム人は日本と日本人が大好きなので親切にしてもらえますし、日本の物も大概売っています。こちらの工場で生産されている製品は安いですから心配ありません。

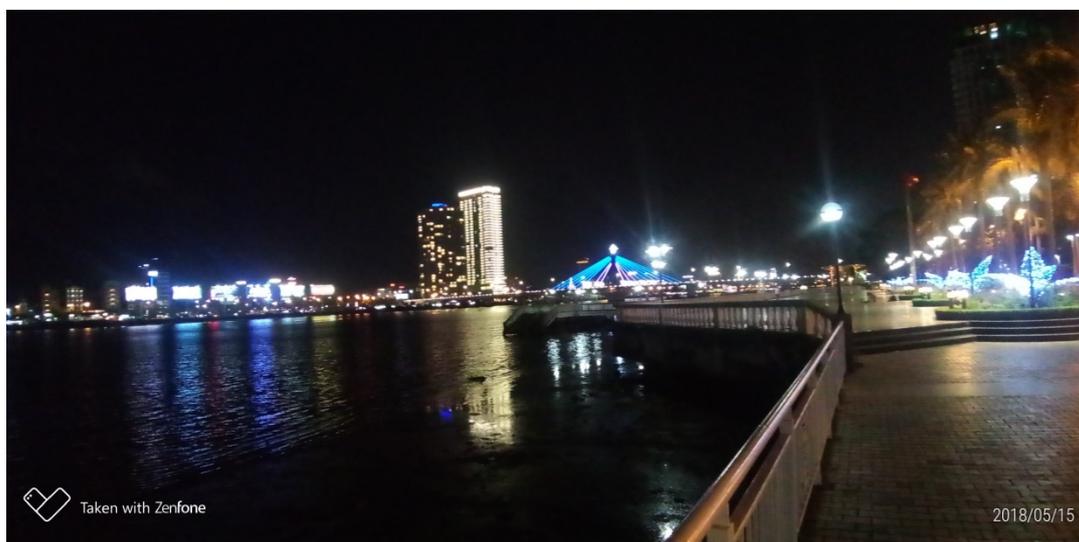


写真 8： Duy Tan 大学近くを流れるハン川沿いの夜景

多分、日本人がこちらに研究者として着任する上で一番心配なのは自主性。上司やグループに管理されて仕事をするのに慣れた日本人にとってベトナムは、生簀で飼育されていた魚が大海に放り出されるようなもので戸惑う人もいるかもしれません。実際、アメリカ人で学位取得後すぐにこの大学に採用された人がいますが、「正直、論文書きさえすれば何でもいいよと言われて戸惑っている。自分はまだ学位論文しか論文を書いたことがない。ここには自分と同じ分野のグループがあると聞いてきたのだけれども...」と言っていた人がいました。ベトナム人でここに採用された人たちの半数以上がアメリカやフランスなどで学位をとって、そのまますぐに就職しているケースがほとんどです。彼らもまた論文の書き方を知りません。しかし、元来、ベトナム人はマイペースや自主性を好みますので余り気にしている人はいません。とはいえ、高度な研究を行うことに慣れている研究者はごくごくひと握り。だからこそベトナムはまだまだ先進国の仲間入りを果たせていないのかもしれない。それでも、ベトナムは時として優秀な科学者を生み出すし、一度、本気で取り組み始めた時の馬力と集中力はすごいので、それが DTU の驚異的な成長につながっているのだと思います。

先日、ハノイの Institute of Nuclear Science and Technology (INST) にセミナーに招かれて行ってきました。核物理の研究者はベトナムにはまだまだ多くはありませんが、Khoa 教授の元で着実にやる気のある元気な次世代の研究者が育ってきています。僕の役割は、彼らとの共同研究を通じて、彼らのやる気と良さを理解しつつ好奇心を刺激しながらも着実に一步一步、研究と研究レベルの底上げに寄与することだと考えています。どの程度できるかわかりませんが、ベトナムの生活とベトナムの自由で豊かな気質や文化に根ざした人間関係を大切にしながら楽しんで頑張っただけでゆきたいと思っています。



写真 9： 夏バテには最適。ミネラル豊富で飲む点滴、ココナッツジュース。

5. おわりに

僕にとって、ベトナムのダナンは全てが新鮮で心地よく、来る前に様々な不安を抱いていたのが馬鹿らしく思ってしまうほどの場所です。僕だけがそうなのかなと思って、色々なベトナム在住の人のブログなどを読んでみると、ダナンに限らずホーチミンやハノイでも、ベトナムの魅力と心地よさにハマってしまった日本人は日本に帰りたくないと思うほどのハマりようだそうです。ただ、一方で、合わない人もいて、合う人と合わない人の差が極端なものもベトナムの特徴だと思います。環境や習慣というよりは、ベトナム人の気質や性格を許容できるかどうかということの方が重要です。というのも、そのへんは日本人に大変良く似ていて、気に食わない、もしくはよくわからないよそ者はいつまでもよそ者扱いで最低限しか面倒見ませんが、気に入ったら家族や親友のように仲間として扱います。日本では核家族化などで随分とライフスタイルも価値観も変わってきたので、そういうところは随分と薄れてしまいましたが、日本でも田舎ではそういうところがまだまだ色濃く残っている所があると思います。ベトナムでは、都市部においてもまだまだそのような価値観が色濃く残っています。ベトナム人の友人の一人が言っていた次に紹介する言葉がまさしく的を射ています。友曰く、「ベトナムでは現地で良い友を得れば天国、いなければ地獄」。まあ、地獄は言いすぎですが、色々と不便なことや理解不能なことが多々存在し、長く住めば住むほどそれが真綿で首を締めるがごとく効いてくるといった程度です。友人ができれば、そういうことが一切なくなる。そのギャップが激しいということを表現しているのだと思います。



写真 10： ベトナムでは 6 月が卒業式シーズン

ベトナムでは色々な大学が随時外国人教員・研究員を募集しています。DTU でも現在 30 人ほど在籍していますが、将来的に 70 人まで増やしたいという方針です。しかし、ベトナムという国は面白いところで、業績のある外国人ならじゃんじゃん採用するという感じでもありません。僕が面接をした人は人事部サイドの判断で不採用でした。

ここには書ききれない色々と昔の日本を彷彿とさせるような価値観や事情がありますので、興味のある方は是非ご一報ください。ただ、ダナンに遊びに来たい方の連絡も大歓迎です。リーズナブルなホテルやおすすめのレストランなどを紹介します。都合が合えば案内します。(ダナンは日本(成田、関空など)から直行便があつて、オフシーズンにはチケット料金が1万円を下回ることがあります。)

参考文献

- [1] "Self-consistent microscopic description of neutron scattering by ^{16}O based on the continuum particle-vibration coupling method", Kazuhito Mizuyama, Kazuyuki Ogata, Phys. Rev. C 86, 041603(R), 2012.
- [2] <https://youtu.be/geFAkrPPGrg>

【補足情報】 ベトナムで働く際に必要な諸手続きには大変なことが一杯！

でも、あんまり情報が少ないので、後進の人のために経験メモを備忘録的に以下に補足として示しておきたいと思います。

補足 1 : 労働許可

ベトナムで働くにあたって最も面倒なのは労働許可の取得。
まず、必要な書類は全て英語版で

1. 学位取得証明 (学士、修士、博士)
2. 過去3年以上の在職証明書 (在職したことのある職場の人事部で発行してもらう。
着任する職種と矛盾しないものでなければいけない。)
3. 無犯罪証明書 (住民票をおいてある都道府県本部で発行) が必要です。

上記 1~3 の書類に対して、

- ① 公証役場における公証人の認証
- ② 法務局における法務局長の公証人押印証明

③ 外務省にて外務省の公印押印

したものを作成しなくてはなりません。つまり、公証役場、法務局、外務省に出向かなくてはなりません。ただし、東京や大阪などの一部大都市では、①～③の手続きを公証役場で行えるワンストップサービスがあるので非常に便利です。ただし、これを利用するためには住民票の所在地がワンストップサービスを行っている都道府県である必要があります。その上で、ベトナム大使館もしくは領事館に書類を持ってゆきます。ベトナム大使館（領事館）で行うことは、準備した公文書をベトナム大使（領事）による認証、つまりベトナムの公文書にするという作業です。ただし、ベトナムの公文書はベトナム語でなくてはならないのでベトナム語への翻訳と認証の2つを行わなくてはなりません。ところがこれが1ページあたり1万円ほどかかります。僕は7ページでしたので7万円かかりました。ただ、これは日本で行わなくてはならないというものではありません。ハノイに行けば、ベトナム語への翻訳と認証作業をもっと安い金額で行うことができるらしいです。ただ、時間がかかりますし、色々ややこしいことが多いらしいです。

日本で準備する場合でも非常に悩ましい問題が一つあります。それは「無犯罪証明書」。これは各都道府県系本部で出してもらえる公文書なのですが、まず、無犯罪証明書を出してくださいと頼みに行くと「契約書を見せろ」と言われます。いや、その雇用契約を結ぶために必要な書類なのに契約書を見せろと言われても困る、という事態がここで生じるわけです。まあ、**Job offer letter** なり、オファーを伝えるメールのコピーを持参するなりをして説明すればここはとりあえず突破できます。ところが、問題はここ先です。警察署で指紋を採取され、所定の書類にサインし、パスポートのコピーをとってもらえば2週間ほどで発行してもらえますが厳封して渡されます。そして、きつく申し渡されるのは「開封したら無効です」。

ベトナム大使館は「外務省の公印が押された公文書」しか翻訳と認証を行ってくれません。一方で、外務省は「法務局が公証人押印証明した公文書」にしか公印を押してくれません。公証人は「警察からの通達により警察が発行した公文書を無効にするような行為（無犯罪証明書を開封すること）」はできないと言います。さて、困った....困って、大使館（僕の場合は大阪の領事館）に行くと、「開封して外務省の公印を押してもらってきてください。それが普通です。」の一点張り。開封したら外務省は押してくれないと言っても、「それじゃ無理」と完全拒否。結局のところ、公証役場の公証人に相談したら、「大使館（領事館）が開けろと言った」という”言質”を持って公証人が認証を行い、公証人押印をする。外務省は法務局のお墨付きがあるものには無条件で公印を押すので公証人さえ公証印を押してくれさえすれば問題はクリアできるのでした。しかし、公証役場にはこういう手続きの経験がない公証人しかいない役場もあるので、そうすると警察と大使館の板挟みにあってどうしようもなくなるといったことが起こりえます。ちなみに公証役場における公証手続きにも1～2万程度の費用がかかります。（こういった事情もあ

るせいか、労働許可をとる手続きを代行してくれる行政書士サービスが結構あるみたい
です。が、もちろん、費用は更にかかることは言うまでもありません。)

大使館（領事館）に書類を提出すると翻訳と認証手続きを行ってくれて、ベトナムの
労務局みたいなところに出せる書類を1週間程度で作ってくれます。そして出来上がった
書類を受け取り、それを先方に伝えると Visa letter を発行してくれます。ベトナムで
働く場合、雇用主が発行する Visa letter がないと労働許可手続きをするための入国ビザ
を発給してもらえません。労働許可手続きはビザを取得し、ベトナムに渡航して、ベト
ナムでメディカルチェック（費用2万円）を受けて、準備した書類とともに雇用する組
織（大学や企業）が労務局に提出して順調に行けば一ヶ月ほどで労働許可がおります。
労働許可がおりると、次は滞在許可の申請になります。この辺は大体大学がやってくれ
ます。で、滞在許可は1ヶ月ほどで手続きが完了します。ベトナムの日本企業で働く場
合、手続きにかかる費用は企業が負担してくれるらしいです。Duy Tan 大学でもある程
度は負担してくれるのですが、規約に基づき総額3万円程度までの負担しかしてもらえ
ませんでした。ただ、手続きを全てベトナム国内で行えば数千円で済むことや平均給与
を考えれば致し方ないところだと思います。

補足2：家族ビザ

夫婦でベトナムに済む場合、仕事をしない方は家族ビザを取得する必要があります。
ただ、注意点は4つ。

1. 家族ビザの発給手続きには夫婦のうち就職する方の労働許可がおりてからでないと
手続きを開始することは出来ない。（なので、同時に渡航することは出来ない。）
2. 家族ビザではベトナム国内で仕事をすることはできない。（ただし、年間90日まで
のバイト程度なら可能。）
3. 家族ビザの取得には「夫婦（家族）」であることの証明書が必要。

「婚姻証明書」を出せと言われるのですが、日本では「婚姻届受理証明書」はあっても
「婚姻証明書」はありません。まあ、多分、それでも構わないのですが、日本にお
いて婚姻関係を証明する書類は戸籍謄本。戸籍謄本は本籍地の役所、婚姻届受理証明
書は婚姻届を提出した役所でしか発行してもらえない上に、後者は郵送で取り寄せら
れない場合が多いみたいなので戸籍謄本の方が無難です。戸籍謄本も取り寄せに時間
がかかる上に、要求されるのは「英語版」。英語版の戸籍謄本を出してくれるかどうか
は役所によります。自分の本籍地でやってくれなきゃアウトなんですね。僕の本籍地
の函館は無理でした。解決策は一つだけ。自分で英語翻訳を準備し、日本語の原本と

翻訳したものの両方を公証役場に持って行って認証してもらい公文書化する（これを私文書認証と言います）。本当は労働許可の場合と同様に、更に大使館でベトナム語への翻訳と認証も必要らしいのですが無犯罪証明書みたいなややこしいことはないので大学に頼めばやってもらえます。

4. ビザの切り替えの際は一度出国する必要がある。

家族ビザの取得前に観光ビザで夫婦揃って渡航することは可能です。しかし、観光ビザから家族ビザへの切り替えの際には一度出国し、出国先のベトナム大使館でビザを申請し受領する必要があります。家族ビザで生活を始めて、途中から働き始めるため労働者ビザに切り替える場合も同様です。

なにより、気をつけなければいけない点は、これらの手続き事情は国によって異なる上に、ベトナムの大学の多くは、まだそれほど外国人を受け入れたことがないので経験値が低いため、手続きに何が 필요한のか先方から言ってくれない危険性が高いということです。

補足3：混雑する道路の渡り方

ベトナムでは混雑時にはよく道路がバイクや車で埋め尽くされて、かつ、信号も殆ど無く、あってもあまり守る人がいないので歩行者が道路を渡るのは容易ではありません。しかし、それでも渡らなければ生活できないのがベトナム。でも、コツはあります。

- ・バイクを自転車だと思え。歩いている自分もバイクだと思え。
- ・ベトナムでは加速・減速は危険。とにかくゆっくり一定のスピードで歩くこと。

日本では、人々は信号をよく見て守ります。ベトナムは信号ではなく、人を見ています。互いに動きあっている中で、刻一刻と変わる状況を常に予測しながらバイクを走らせているので、ベトナムで最も危険なことは「ドライバーの予測を裏切る行為」が最も危険なのです。ドライバーの予測しやすい動き方で歩いてさえいれば、どんなに混雑する道路でも普通に横断できてしまうのがベトナムです[2]。で、これに慣れて気がつくのは、意外と日本はドライバーが人を見ていないこと。「日本は信号やルールには従順だけれども、人は見ていない」場合が結構多いんです。もし、人を見ていたのであれば、赤信号でも道を横断できるはずですが、実際にはかなりの確率で轢かれてしまうでしょう。